



大台風ぼたんの寺に人の影
 エナメルの白きヒールや十二月
 「水団の粉」と貼りをり冬の町
 制服が見る間に短し初時雨
 とりに行く林檎一つのあづかり所
 桜紅葉してガス展に鉢並ぶ
 釣り人に仙境のあり彼岸花
 別珍と言つてわらはれ春支度
 誌されし阿茶とは扱てと石路の花
 霜降月バツタをいろいろ見し今年

『まえだとし女 六百五十句』



葉牡丹の金粉を視る二三人
 高架線あわだち草の深き冬
 髪の上から襟巻をまとひをり
 コラーゲンを言ふ若者や暖房車
 大寒や去る暑き日の渋谷駅
 駅前はいづこも変り三日かな
 坂道に花屋の記憶二月果つ
 二月空祖父ありし日は宮大工
 新巻の尾の方に掛け厚き布
 往古里き来するどこかの船や春の浪

『まえだとし女 六百五十句』



『まえだとし女 六百五十句』

穏古里やかな海の風なり麦の飯
 多人数で麦の確たる麦ご飯
 麦飯の焦げを綺麗に取る女
 メーデーの列に京葉の意味をふと
 柿若葉笑顔の奏者たちもまた
 柿若葉チューリップ畑へと下る
 古民家とレジャーシートや柿若葉
 話されて後は涙の夏期講習
 夕花火ハートをハートとみなが言ふ
 時の日を小走りにさせ踏切は

仕付けの目どこかなつかし春の雪
 リサイクルの袴の仕付け四月かな
 黄の花を一筋のせて別れ雪
 饅頭店塵取で搔く春の雪
 桜餅終りましたと嬉しげに
 三角とふバス停で降り春時雨
 春の服ホテル食きて我勝ちに
 凧の糸妹はじつと持つばかり
 逃込みし鶏がゐる彼岸かな
 春の池マイナスイオンを言ふ人と

『まえだとし女 六百五十句』





『まえだとし女 六百五十句』

運動会この子のもとへ駆出され
 深川は鉢の中なる夕紅葉
 葉月敬老日尽 駅を浴衣の人一人
 甘瓜敬老日や水をたたへし金盃
 秋めくや小紫蘇の青く茎赤く
 カ持などと言はれて秋うらら
 青天が吊り下げてをり秋の蜘蛛
 古里を南下の我と秋刀魚かな
 雨の止み小豆の花をしみじみと
 秋の日の近くて遠き隅田川

躓いて知る虎尾とらの草をの咲くところ
 酔じやうゆと誰かの声が夏暖簾
 風通るかどやの角で氷水
 風鈴や縦一列が意味を持ち
 涼しさは絵馬屋へ路地を出でし時
 渾然と芭蕉の像と青葉かな
 新秋の園見はるかす乳母車
 早生物園技が緑の捕虫網を引く
 今日生れて行方不明の蝶の午後
 おらさきをたたみ休める蝶もゐて

『まえだとし女 六百五十句』

